

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 26 日現在

機関番号：10102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23730689

研究課題名(和文) 自死遺族ケアのためのナラティブ・ワークブック開発の試み

研究課題名(英文) Development of a narrative workbook for suicide survivors

研究代表者

川島 大輔 (Kawashima, Daisuke)

北海道教育大学・教育学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：50455416

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、自死遺族ケアをめぐる実情、つまり遺族が自らのグリーフワークにおいて能動的に意味を再構成することが難しく、他者とのコミュニケーションを希求していることに配慮し、ナラティブ死生学の観点から、自死遺族が自らの死別経験を物語として再構成し、他者と対話するためのツールとなる、ナラティブ・ワークブックを開発した。これは自死遺族ケアをめぐる実情を改善すると同時に、自死遺族のセルフヘルプに直接的にむすぶつくものである。

研究成果の概要(英文)：Problems: Despite a suicide rate that is almost 30,000 people annually since 1998, studies and related efforts regarding suicide prevention have been insufficient in Japan. Purpose: A workbook for suicide survivor has been made from the viewpoint of Narrative Thanatology. Methods: Firstly, literatures and related works regarding the grief process of suicide survivors had been collected and reviewed. Secondary, drafts of workbook had been constructed from the viewpoint of Narrative Thanatology. Thirdly, individual/group interviews regarding the narrative workbook had been done for professionals and survivors. Finally, the narrative workbook for suicide survivors has been reconstructed from the results of the interviews. Results: The narrative workbook contains the works for their meaning reconstruction and the devices to promote re-authoring their narratives and relearning the relationships with others.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：自死遺族 グリーフワーク ナラティブ 意味再構成

1. 研究開始当初の背景

日本の自殺者数は1998年の急増以来、年間3万人以上を記録し続けており、自殺対策はわが国における緊急の課題である。とくに自殺対策基本法の第十九条において、遺族への支援が基本的施策として示されているように、自死遺族ケア・支援は、日本の自殺対策の大切な柱として位置づけられている。自殺が生じた際の事後対応、いわゆる「ポストベンション」(Shneidman, 1970)が極めて重要であるのは、遺族の悲嘆をケアすることが自殺のリスクが高い遺族の新たな自殺を防ぐ役割を担っている(高橋, 2006)からでもある。

欧米では十分とはいえないまでも、自死遺族ケアに先立ち必要不可欠な自死遺族のメンタルヘルスや悲嘆の実態(Sveen & Walby, 2008)や、ニーズ(Provini et al, 2000)について検討されているが、日本では十分な蓄積がない(川島・川野, 2011)。そこで川島らは全国の自助グループ・支援グループに属する自死遺族111名を対象に調査を実施し、支援へのニーズと悲嘆の実態を検討してきた(川島・川野, 2009; 川島他, 2009, 2010; 川野他, 2007)。この調査は、複数の団体に所属する自死遺族を対象とした、日本ではじめての実証的研究である。結果、自死遺族ケアをめぐる実情として、(1)自死遺族は自らのグリーフワークにおいて能動的に意味の再構成に従事しようとしながらそれが困難であること、(2)遺族は社会的スティグマや偏見に晒されることを恐れながら、他者とのコミュニケーションを求めていること、が明らかになった。

(1)について、死生学、とくに死別研究では、悲嘆を死別による単純な反応や病理として扱う視点から能動的に意味の再構成(Neimeyer, 2001)に従事するプロセスとして捉える視点への移行が見られる。上記の調査結果から、自死遺族の意味再構成、とくに自殺の原因を何とか理解しようとする意味理解の活動が、彼らの精神的健康(抑うつ、人生充実感)に強く影響していることが明らかとなった(川島他, 2010)。しかし自殺に対するスティグマは今なお根強く、自死遺族のグリーフワークにおける能動的な側面が、わが国の自殺対策の専門家や一般住民の間で十分理解されているとはいえない。そしてそのことが「遺族の悲嘆は病気ではないのに、治療の対象と見られる」といった自殺対策に取り組む人々と自死遺族当事者との対立や摩擦、そして「遺族同士でしか気持ちはわからない」「自死遺族支援に専門家は必要ない」といった遺族支援をめぐる閉塞的状况を生み出す一因となっていると推察される。また(2)について、自死遺族当事者が頻りに口にする「傷つけられた経験」について詳細に検討した結果、自死遺族は社会的スティグマや偏見に晒されることを恐れながら、それでもなお他者とのコミュニケーションを求め

ており、その結果として「傷つき」あるいは「支え」を体験することが確認された(川野, 2009)。

上記の研究成果は、自殺予防総合対策センターが企画、運営する自殺対策相談従事者研修の基礎資料として活用された。また申請者が編集協力者として関わった、ガイドライン「自死遺族を支えるために」(厚生労働省, 2009)の基礎資料としても活用された。これらの取り組みは日本の自死遺族ケアを大きく前進させたといえる。

しかしガイドラインや研修は、自死遺族当事者の直接的ケアに結び付くというよりも、支援に携わる専門家への支援となるものであり、当事者が自らのグリーフに能動的に関わるために有用なツールではなかった。また各地の自治体等で作成される自死遺族向けのパンフレットは、自死遺族のメンタルヘルスや悲嘆の状況、有効な社会資源についての一定の情報を提供するツールではあったが、そこに自死遺族当事者が能動的に関われる余地はほとんどなかった。さらに自死遺族を取り巻くスティグマや社会的偏見に対する配慮を行いながら、他者(家族や親せき、専門家等)とのコミュニケーションを促す取り組みについて検討されることは、これまでほとんどなかった。そしてこれらの問題が、当事者と支援者間のディスコミュニケーションが改善されないことに深く関わっていると考えられる。以上より、自死遺族が自らのグリーフワークにおいて能動的に意味の再構成に従事することができ、かつ他者とのコミュニケーションが促進される、新しいツールの開発が必要である。

なおツールの開発に当たってはとくに自死遺族の能動的な関わりについての理解が必要となるが、その理論的観点として、「ナラティブ死生学」(川島, 2011)が有用である。近年、死生学領域において物語の視点が重視されはじめているが(Klass, 2001; Neimeyer, 2001; Thorson, 1996; Walter, 1996) ナラティブ死生学はとくに、生涯発達過程における社会文化的文脈や重要な他者との相互交渉を通じた意味の再構成を重視する、死生学における理論的枠組みとして提案されたものである。ナラティブ死生学の観点では、自死遺族は自らの経験を語り直すことで、また他者との対話を通じて、意味を再構成しようとする存在として捉えられることから、既述の自死遺族ケアをめぐる実情を克服しうる理論的枠組みとなりうる。

ツールを構成するコンテンツに関して、死別を経験した人が物語の語り直しにより、意味の再構成を行うためのワーク(Neimeyer, 2002/2006)は、本研究で開発しようとするツールのひな型として考えられる。ただし、これらは死別一般に関するワークであり、自死遺族の悲嘆の有り様は他の死因とは異なる点があること(Jordan & McMenamy, 2004)を考慮すれば、自死遺族ケアに焦点化

したワークを開発することが必要である。また様々なコンテンツを含んだ、自死遺児向けのアクティビティ・ブック (The Dougy Center, 2001) も本研究の目指すものと近いが、ここでは大人の自死遺族を対象とし、さらに他者とのコミュニケーションを促すための工夫も行うことで、日本の自死遺族の実情に沿ったワークブックの開発を目指す。また自死遺族の多くがメンタルヘルスや経済、法律上の問題について悩みを抱えていながら、支援につながりにくいこと (Cerel & Campbell, 2008; 張, 2006; 川野他, 2010) を考慮して、既存のパンフレット等を参照し、遺族が経験しやすいメンタルヘルスの問題、有効な社会資源の情報を盛り込むこととした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、自死遺族ケアをめぐる実情、つまり遺族が自らのグリーフワークにおいて能動的に意味を再構成することが難しく、他者とのコミュニケーションを希求していることに配慮し、ナラティブ死生学の観点から、自死遺族が自らの死別経験を物語として再構成し、他者と対話するためのツールとなる、ナラティブ・ワークブックを開発することである。

3. 研究の方法

まず自死遺族ケアの重要要素 (能動的な意味再構成、他者とのコミュニケーション) に関する、国内外の関連文献およびコンテンツを幅広く収集した。また死別ケアに関するワークや臨床的支援のためのコンテンツも収集した。

その上でグリーフカウンセリング、自殺予防、ナラティブ・ブラックティス、自死遺族支援に関する複数の専門家へのインタビューや意見交流を行い、コンテンツ案を確定した。その際、とくに意味再構成および3つの学びなおし (自己の学びなおし、故人との関係の学びなおし、世界の学びなおし) というメタファーを理論的支柱とした。あわせてナラティブ・ブラックティスの方法論を援用した。その上で、グリーフカウンセリング、トラウマへの弁証法的行動療法、認知行動療法、ゲーミング、ナラティブ・ブラックティス等において開発報告されている様々なワークを再構成し、ワークブックの案を開発した。そして自死遺族への個別ないしグループでのインタビューを行い、ワークブックの内容を修正し、ワークブックを作成した。

またワークブックの作成と平行して自殺予防・自死遺族支援にかかる研修効果測定指標の開発や自死遺族の悲嘆についての事例研究を実施し、発表した。その研究成果を学会、公開シンポジウム等の場において発表することで、研究者、専門家、当事者との活発な意見交流を行った。

4. 研究成果

作成されたワークブックは大きく1部「ワーク編」、2部「解説編」に分かれている。ワーク編はさらに大きく8つの章に分かれており、序章と終章以外に6つの本章がある。本章はそれぞれ世界の学びなおし、故人との関係の学びなおし、自己の学びなおしという、それぞれ異なったグリーフのプロセスに取り組みるように構成されている。具体的には、一章と五章で展開されている「世界の学びなおし」では、愛する人がいなくなった世界で生きていくために必要な事柄を学びなおすためのワークが準備されている。三章と四章の「故人との関係の学びなおし」では、亡くなった方との関係について考えていくことのできるワークが準備されている。そして二章と六章で取り組むこととなる「自己の学びなおし」では、死別の経験の意味や、それを受けた自分自身の人生をもう一度見つめなおすワークが準備されている。「解説編」では、自死によるグリーフについての研究知見や、ワークの理論的・学術的背景についての解説が展開されている。

本研究を通して、自死遺族が能動的に取り組めるワークとともに、他者とのコミュニケーションにつながる仕掛けを盛り込んだナラティブ・ワークブックが開発された。これは自死遺族ケアをめぐる実情を改善すると同時に、自死遺族のセルフヘルプに直接的にむすびつくものである。

これまでポストベンションに関する研究は少なく、またそれを直接、自死遺族ケアの実践に結び付けようとする研究は見当たらない。ナラティブ死生学という観点から、自死遺族が自らの物語を再構成し、他者との対話を行うためのワークブックを開発しようとする本研究は、死生学や自殺予防学において常に指摘される (川島, 2011) 研究と実践現場の境界に架橋する試みといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

- Kawashima, D., & Kawano, K. (2013). The Validity of the Japanese Version of the Suicide Intervention Response Inventory. *Journal of Mental Health (精神保健研究)*, 59, 67-74. 査読有
- 川島大輔・川野健治・白神敬介 (2013). 日本語版 Attitudes to Suicide Prevention Scale (ASP-J) の妥当性と信頼性 医療従事者の自殺予防に対する態度測定尺度の開発 *精神医学*, 55 (4), 347-354. 査読有
- 川島大輔・川野健治 (2012). 自殺の危機介入スキル尺度 (SIRI) 短縮版作成の試み *心理学研究*, 83(4), 330-336. 査読有

〔学会発表〕(計5件)

Kawashima, D. (2013.7.10). Meaning Reconstruction Process after Suicide: Life-story of a Suicide Survivor. 13th European Congress of Psychology (Stockholm, Sweden).

川島大輔 (2012.3.13). 自死遺族のグリーフとケアへのニーズ 平成 23 年度自死遺族ケアシンポジウム(大田区産業プラザ(Pi0)コンベンションホール).

川島大輔・川野健治 (2012.3.9). 自死遺族の語りにみる死別後の意味再構成プロセス 事例検討 日本発達心理学会第 23 回大会 (名古屋大学).

荘島幸子・川島大輔・川野健治 (2011.9.17). 死・自殺のイメージスキーマ 日本心理学会第 75 回大会 (日本大学).

Kawashima, D. (2011.7.15). Meaning Reconstruction and the Aftermath of Suicide. International Symposium of Life-span Developmental Psychology (Northeastern Illinois University, USA).

〔図書〕(計 1 件)

川島大輔 (印刷中, 2014). 自死で大切な人を失ったあなたへのナラティブ・ワークブック 新曜社

〔その他〕

ホームページ等

<https://sites.google.com/site/kawashimeroom>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川島 大輔 (KAWASHIMA, Daisuke)

北海道教育大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：50455416